短 報

キダチイナモリ（アカネ科）の八重咲き品（山崎 敬）
Takasi YAMAZAKI: A Polypetalous Form of *Ophiorrhiza japonica* Blume (Rubiaceae)

標本を整理している時，キダチイナモリの八重咲き品が見つかった．花弁は内外それぞれ5片に裂け，外側の片は披針形で，内側の片はやや小さく，広楕円形である．本種の八重咲き品はまだ知られていないようなので報告する．採集者の吉江晴朗氏によると，雄しべと雌しべの発達が不完全で，栽培しても結実しないという．

Ophiorrhiza japonica Blume forma **plena** Yamazaki, f. nov.

Corolla 10-lobata, lobis 5 exterioribus lanceolatis acutis, 5 interioribus minoribus late ellipticis apiculatis.

Hab. Kyushu, Miyazaki Pref., Kitamorokata-gun, Yamanokuchi-mura, Mt. Aoidake (S. Yoshie, May 31, 1936, Typus TI).

（165-[redacted] 東京都中野区[redacted]）

新 刊

□河野昭一（監）：**植物生活史図鑑 I.** 112 pp. ISBN: 4832913719. **II.** 110 pp. ISBN: 4832913816. 2004. 各￥3,000. 北海道大学図書刊行会.

植物観察というと種類の区別点に注意が集中し，植物誌でも産地や花期の記述と名前の異同の記事が付け加わるのがせいぜいである．日本のフロラの調査は一応片づいたと言われるけれど，昆虫のように一つ一つの種の生活史の観察・記録に，みんなが興味をもつ風潮が見られないことを嘆いてきた．河野氏は昔からフェノロジーの調査研究に精力的に取り組んできた．本書はその成果で，全10巻を予定している．フェノロジーというと「生物季節」という訳語があり，植物では花暦とか，動物ではツバメがいつ来たとか赤トンボの初見日というような農事暦に近い感覚があるが，生活史（life history）として捉える方が，これからの植物観察の発展に有用で，本書はその指導書として，新しい視点を提供するものである．

I，II巻は春の植物にあてられており，Iにはカタクリ，ヒメニラ，コシノコバイモ，チゴユリ，ホウチャクソウ，キバナノアマナ，ウバユリ，オオバナノエンレイソウ，ミヤマエンレイソウ，ショウジョウバカマの10種類が記述されている．II巻もフクジュソウはじめ10種類で，河野氏はじめ何人かの分担，共同執筆である．

記述は一種類に8頁が割り当てられており，内容は先頭のカタクリの見出しを挙げると次のようになる．地理的・生態的分布，フェノロジーと野外集団の構造，地下での挙動，生活史の特徴，経年成長の過程，栄養繁殖の役割，有性繁殖の仕組み・交配システムと送粉システム，種子散布の仕組み，染色体と核型，カタクリ属の仲間とその分布，自然保護上留意すべき点．他の種類でもほぼこのような内容が，それぞれの生活様式に応じて適宜組み合わされている．本文の横には5 cmも余白がとってあり，そこに本文に現れる術語や生物名が書き出してあって，巻末の用語解説や事項索引に結びつくようにしてある．この余白は，利用者が独自の観察結果を書き込むためにも使える．英文による記述が1頁ずつ付けられている．生活の各段階を示すカラー写真と植物画および日本全域の分布図が1頁ずつ挿入されており，とくに地下部や幼体はそこらの図鑑には見られないものなので，参考になる．植物社会学的調査研究にも有用である．分布図は河野氏はじめ協力者の調査結果に加えて，これ迄発表されたものからスキャ

ナで読み取って集成したとのことである(河野氏私信による).分布図を異なる基図上に転写することは難事だったが,工夫のしようはあるものだと思った.巻末には共通の参考文献と種類ごとの参考文献のリストがある.

本書がわが国の植物の観察や調査に,新たな展望をもたらすことは疑いない.ただし内容はかなり高度なものなので,一般の人々に「こういう見方があるのだ」と普及させるには,もっとくだいた内容のものも期待したい.とくにこういう現象の共通で簡単な記録法があると,たくさんの人の参加が得られ,地域的な違いや新たな発見につながるだろう.千葉県植物誌で大場達之氏が提示したような手法が紹介されていたら,と考えた.分布図は多くの人の協力によるものが多いので,そういう場合には謝辞には仲介者よりも出典を記した方が,みんなのはげみになるだろう.

(金井弘夫)

□大場秀章:**サラダ野菜の植物史** 232 pp. 2004. ¥1,100. 新潮社. ISBN: 4106035375.

知らぬ間に最後まで読んでしまった.サラダに使われる野菜について,キク科,セリ科,アブラナ科,ウリ科,ユリ科,ナス科とまとめてあり,生植物ならなんでもサラダになるのではなく,大分部はいくつかの科に限定されるという,植物分類学的見地から入ってゆく.ここらが用途別に記述される通常の料理本とは異なる.巻末の植物名リストによると,学名を付されたものだけで180種類におよぶ.サラダの発祥は,古代の人類が,苦みや辛みがあるために草食動物が嫌って食べ残した結果,大繁殖した草原の植物を利用したのが元だという考察は面白い.中身は広範な古典の知識と著者自身の海外体験を踏まえて,種類の発見,導入,伝播,利用法の変遷からソースの種類にいたるまで,様々な話題が語られる.とくに学名や,欧州語に由来する和名については,その語源にまで遡って蘊蓄が披露されていて,得るところが多い.最後のその他のサラダ植物では,今後発展しそうなサラダ植物まで言及されている.講義のタネ本としても有用だろう.

(金井弘夫)

□矢野正善:**カエデの本** 400 pp. 2003. ¥6,000(送料込). 私版. No ISBN number.

著者はカエデの栽培家である.16–77頁は日本の野生種で,A4版見開き2頁に1種類,80–346頁は栽培品種で,1頁に2品種が,美しいカラー写真で示されている.野生種の部では,地域変異や生育時期による違いが,栽培家ならではの目で記述されている.野生種の部の末尾に「カエデを観察していて感じたこと」と題する短文があるが,図鑑に出てくる平均的寸法や形を割り出すことのむづかしさが,実感をこめて述べられている.葉形のいろいろな形が種ごとに示されているのもこのためだろう.またヤマモミジの変異性(地域的・生育期的)が大きいこと,その一方イタヤカエデ類は種の形質が安定しているのに,一般には分類がむづかしいとされていることなど,長年の栽培・観察から得られた知識が語られている.

この本の主体をなす園芸品種の部は,ふだん注意を払っていないために,こんなにいろいろな変化があるのかと感嘆するばかりである.品種名,学名,発表(登録)年,特徴,栽培上の注意などが簡潔に記されている.巻末にはカエデに関する文献約700件(年代順配列),月ごとの栽培管理法,園芸品種名索引,カエデの名所リストがついている.すべての文章に英文の対訳が伴っており,わが国のカエデを国外へ紹介する有用な資料である.希望者は前記代金を現金書留で著者(630–[redacted] 奈良市[redacted]. Tel [redacted])宛て送付すること.

(金井弘夫)